

新刊紹介

大橋広好訳：国際植物命名規約 1988 i-xii+214頁.
1992.

津村研究所 2,500円

藻類を含めておよそどのような生物にも名前があり、それは万国共通の学名によって表示される。植物の学名は2名法によって作られ、ラテン記載を伴い、使用した基準標本は保存場所を明記して発表しなければならない。これらのことは国際植物命名規約の条項に基づいたものであり、これに適合しない発表は無効となる、などのことは藻類の研究に携わる人の誰もが知るところであるが、新種記載でラテン語を伴わないものでも藻類については1958年1月1日以前の発表であれば有効である（藻類以外は1935年）。しかし以降はラテン記載に加えて形態的特徴を示す図解または図を伴わない発表は無効であるとか、分類上の所属がわかり、異なる属との新組合せを作る場合は basionym（基礎異名）とその著者及びその発表の出典を明記しないと無効であるなどの条項となると心得ない人が結構多い。

本書は国際植物命名規約 (International Code of Botanical Nomenclature) の全訳である。植物命名規約は6年ごとに開催の国際植物(科)学会議の折に条項の手なおしや保存名の追加などが行われ、その後刊行されることになっている。本書は1987年にベルリンで開催された会議で採択され、1988年に刊行されたものである。以前のものは条文がそれぞれ英、独、仏の3か国語で記述されていたが、ベルリン会議版から英語のみとなった。本訳書は、前文、第I部原則、第II部規則と勧告、第III部規約改正の規定、付則雑種の学名、事項索引、英和用語集、学名索引、訳者あとがきより成り、主体の第II部は、第I章分類群のランク、およびその表示のための用語(第1-5条)。第II章分類群の学名(一般的な規定)(第6-15条)、第III章ランクに応じた分類群の命名法(第16-28条)、第IV章有効発表と正式発表(第29-50条)、第V章学名と形容語の維持、選択および廃棄(第51-72条)、第VI章学名と形容語の正字法および属名の性(第73-76条)となっている。なお原著の付則にある保存名と廃棄名のリストは本訳書では省略されている。

命名規約は一種の法律である。六法全書を見てもわ

かるように、用語や文章の構成・表現はわれわれに馴染みの少ないものが多く、理解は容易でない。まして原著は外国語で書かれている。私事に亘って恐縮であるが、筆者は前職にあるとき、新しく大学院生が入ってきたときは一緒にこの命名規約の逐語訳を行い、これを綴じて私家本とし、命名上の問題にぶつかった時はこれと原著とを取り出し、互いに首っ引きで問題の解決に努力することを常とした。今回、この分野の学問に造詣の深い大橋広好博士(東北大学理学部教授)による日本語訳の刊行を見たことは実に有難く嬉しい。訳者は読者の理解を助けるために必要と思われる箇所に訳注を加えている。たとえば、“本規約で type (*typus*) という言葉はすべて命名法上のタイプ、すなわち学名のタイプを意味する。ホロタイプ、レクトタイプ、パラタイプおよびネオタイプは標本または図解がタイプであり、アイソタイプとシンタイプは標本がタイプである”，と言った具合である。訳者はまた幾つかの新しい用語を作っている。たとえば、diagnosis→判別文、protologue→初発表文、avowed substitute→公認代置名などである。先にも述べたように、命名規約は一種の法律である。日本文と的小编も読み流してわかるというものではなく、時間をかけないと理解しにくいところがあちこちにある。出来れば原著を備え、理解しにくいときは原文と読み比べるとよいだろう。訳者への註文を言わせていただくならば、訳注をより多くし、わかり易い解説を随所に挿入下されると、本書は初心者にとってさらに取り付き易いものになったと思われる。巻末の事項索引の他に、訳者は英和用語集の項を設け読者の便に供している。分類上よく使われる用語が一目瞭然で便利である。多くの労力と時間を必要とする命名規約の全訳に努力された大橋博士の労を多とするとともに、採算を度外視した廉価で本書を発行された津村研究所に敬意を表したい。分類学者だけでなく、広く藻類を研究する方々に座右の書として備えたい本である。なお本書は市販されていないので希望者は直接津村研究所(300-11 茨城県稲敷郡阿見町吉原3586, TEL 0298-89-3832, FAX 0298-89-2158, 振替 東京8-1680)に申込むこと。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)

 新 刊 紹 介

三浦昭雄編：食用藻類の栽培 150頁．1992．
恒星社厚生閣 2,500円

日本ほど藻類を日常生活に利用する国は世界に例を見ない。900年代初期に編纂され、当時の日本の諸制度等を記した延喜式に、海藻を税として朝廷に納めるという記述があるので、日本の藻類利用の歴史は優に千年を越える。しかし、たねをまき、育て、そして収穫する栽培技術は開発されることなく、海藻産業はいわば掠奪農業として今世紀に至った。今回出版された「食用藻類の栽培」を見てまず感心することは、今世紀後半のおよそ40年間に、日本のわれわれの先輩および同僚の藻類研究者の努力により、食用の対象となる藻類のほとんどすべてについて、たねまき、育苗、それに続く栽培の技術が確立されたという点である。

本書は平成3年4月の日本水産学会大会の折に開催された同名のシンポジウムの講演集で、とりあげられた藻類と執筆者は下記のようなものである。ノリ(三浦昭雄)、ヒトエグサ(喜田和四郎)、ワカメ(秋山和夫)、コンブ(川嶋昭二)、オキナワモズク(新村 巖)、アオノリ(大野正夫・松岡正義)、クビレヅタ(当真 武)、マツモ(内田 務)、ヒジキ(四井敏雄)、スイゼンジノリ、オキチモズク、ハバノリ、ムカデノリ(右田清治)、インモズク、ウミゾウメン、ミル(四井敏雄)、トサカノリ(喜田和四郎)。上記の藻類の栽培の記述でⅠ～Ⅲ章が占められ、Ⅳ章では健康食品として見直される藻類の食物繊維についての最近の知見の紹介

(平野敏行・鈴木 健・白井隆明)があり、そして最後に総合討論がⅤ章に収録される。

藻類は陸上の種子植物とは対照的に、体制は単純であるが生活環は複雑なものが多く、しかも水温、照度、日長、栄養塩など環境要因の変化に応じて生活環の各相は著るしい変化を示す。さらに藻類の多くは分類群ごとに独特な生活環の様式をもっている。当然であるが、藻類の栽培技術の確立にはまず生活環と環境とのかわり、つまり生活史の知識の蓄積が必要である。本書はそれぞれの藻について生殖・生活史の概略を述べ、次いで採苗、育苗、養殖などの栽培技術を詳述する。それらの基礎データのほとんどは日本の藻類研究者により蓄積されそして確立されたものである。私事に亘るが、筆者が戦後間もなく藻類の研究を始めた頃は、本書で扱われる藻類のうち生活環がある程度わかっていたものはコンブとワカメそれにヒトエグサぐらいであった。本書は藻類の栽培技術のノウハウだけでなく、藻類の生活史や生態についての基礎知識も与えてくれる。この点、本書は藻類の栽培に興味をもつ人だけでなく、藻類の分類、形態、生理、生態等の研究者、さらには藻類の生物工学を目指す人々にも必見の価値があると考えられる。食用藻類の戦後の研究成果の集積ともいべき本書の編集責任の労をとられた三浦昭雄教授を始め本書の執筆に努力された諸氏に深く敬意を表したい。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)